慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	生産的及び不生産的なる語に就て（三）
Sub Title	
Author	榎本, 鉱治
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.9 (1924. 9) ,p.1327(147)- 1342(162)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240901-0147

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

された。彼は一八七〇年二月十九日を期して大衆運動を勃發せしめんと企畫して居たのである。併し此の秘密計畫は組織内部の刺絡に依つて自らの破綻を招來した。こは團員 Aspenski がネチャエフの命を哺み、内通の嫌疑に依つて同僚 Ivanov を殺戮せる事件である。此事件の審問に關聯して全組織の秘密が次第に暴露した。ネチャエフは遂に革命運動の指導者たる地位を失脚して海外へ逃亡した。（註一）

ネチャエフの矯激なる陰謀主義は決してバクウニンの眞意を傳承したものではなかつた。初め彼を信任する事厚かりしバクウニンは、後年に至りては口を極めて之を非難した。即ち一八七〇年には彼を背信者なりと呼び、同七二年には其の權謀術數と奸譎を責めて居る。バクウニンは彼を以て目的は總ゆる手段を神聖化するといふ原則を惡用したものであると難じた。後代の社會運動の指導者等も殆ど擧つてネチャエフの手段を排斥した。（註二）（Masaryk. op. cit. pp. 86-88. Kulczycki. a. a. O. SS. 477-480. Hecker, Russian Sociology. p. 41. Prupbacher, Marx und Bakunin. S. 90 參照）

故にネチャエフの失敗はバクウニンの名聲を損傷するの所以とはならなかつた。七拾年代に至りて後者の影響は更に著るしく露西亞社會運動を支配して居るのである。併し乍ら、露西亞社會運動史上に於けるバクウニンの地位を理解し得る爲めには、先づ革命主義を奉ぜる當時の露西亞亡命者等の國際勞働者協會（即ち第一インタアナショナル）に對する關係、並に國際勞働者協會に於けるバクウニン派とマルクス派との確執を明にし、進んで國際勞働者協會の分裂後バクウニンの無政府主義思想の影響が益々露西亞社會運動の上に優勢となりし事情、而して之れが實際運動上に如何なる形を以て現はるゝに至りしやを考察しなければならないであらう。

（註一）ネチャエフは一八七二年瑞西で逮捕せられ本國へ送還された。そして二十年の懲役刑に處せられ、セント・ピイタア及びセント・ポールの城砦に監禁せられ、一八八二年其處で牢死した。

（註二）後の機會に詳述す可きラヴロヴ(Lavrov)派の綱領一八七三年――）がネチャエフの叙上の態度を擯斥して居るのは勿論、七十年代初頭の「民衆の中へ」(V'narod)運動の中心勢力となつた所のチャイコヴスキイ團(Čaikovky)の人々も亦斷然ネチャエフの綱領を否認した。Kropotkin の如きも亦必ずしも武裝的革命の觀念を排斥しなかつたけれども、同志に對すると敵に對するとに論なく、一切の詐欺手段には反對して居る。

附記　筆者は「農奴解放後の露西亞社會運動」なる標題の下に一八八三年露西亞社會民主黨の前身たる「勞働解放團」(“Gruppa Osvobozdenija Truda”)が出現するに至る迄の社會運動、即ち露西亞マルクシズム運動前史の概略を記述する豫定であつた。故に上述せる所は其の一部、六十年代の其れに過ぎない。他日續稿を草し得ば幸ひである。

生産的及び不生産的なる語に就て（三）

榎本鑛治

十四

エイ・ダブリュー・フラックス氏(A. W. Flux)に從へば、古來經濟上の論議に用ひられし生産的及び不生産的なる語の意義は、時代の推移と共に著しき變化を示して居る(Palgrave's Dictionary of Political Economy, 1918, vol. III, p. 216)

然らば歴史上に生産的及び不生産的なる語の用例を求めゝならば、凡そ如何なる時代に迄遡る可きであらうか。勿論是れは難問であるけれども、大體に於て所謂マーカンタイル・システム流行以來のことゝ見れば、大過があるまいと思ふ、現にかの英國經濟史の大家カンニンガム

(W. Cunningham)に依れば、近代經濟學者の用ふる所謂生產的及び不生產的勞働の區別に相當するものは、既に早く一三七三年 Nicholas Oresme の所論中に暗示せられて居ると云ふ。(W. Cunningham, Growth of English Industry and Commerce, during the early and Middle ages, 1922, p. 357)併し現在の論文に於ては之を簡單に取扱はなければならぬが故に、暫らく其の詳細を割愛する。

由來經濟學者は、生產效力(productivity)に就て說明する場合には財及び價値に關して彼の抱懷する先行的觀念に基づかざるを得ない。去ればマーカンタイル・システムを信奉せる經濟學者が、內國採鑛の方法に依ると將又外國貿易の手段に依るとを問はず、國有に係る貴金屬を增加せしむ可き生產要素の適用方法をのみ生產的と看做したのは至當である。何となれば此の主義は國富の觀念を金及び銀に限定するからである。(W. Roscher, Principles of Political Economy, translated by J. J. Lalor, 1878, vol. I, Bk. I. Ch. II. Sec. XLVIII. pp. 167-169.)

然るにマーカンタイル・システムに對する當然の反動として唱導せられたるフヰジオクラシーは、社會を三分して(イ)生產的階級(classe productive)(ロ)地主階級(classe des proprietaires)及び(ハ)不生產的階級(classe sterile)となしたのである。而して斯說は土地に重きを措けるが故に、生產的階級には農夫を屬せしめ、地主階級には地主を屬せしめ、又不生產的階級には工匠を屬せしめたのである。即ち此の主義を信奉せる經濟學者は、所謂純生產(若くは純收穫 produit net)を重要視して土地をば富の唯一の源泉とせるが故に、農夫以外のものは不生產的階級の中に繰込まれたのである。從て商業の如きは、要するに此方より彼方へと既存の富を讓渡するに過ぎぬが故に、不生產的と稱せられたのである。換言すれば生產的階級とは、人間の諸目的に取て有用なる原料の數量を增加せしむるものを指すのであり、又不生產的若くは給料を與へらるゝ階級とは、地主及び農夫の餘剩より所得を抽き出すものを云ふのである。(Roscher's Principles, pp. 170-173. Jan St. Lewinski, Founders of Political Economy, 1922, pp. 36-42)

即ち右の二主義の生產的及び不生產的に關する見解は、其の富に關する概念の廣狹に依て著しき相違がある。加之斯る叙述を以てしては、生產的及び不生產的なる二說の適當なる使用に就て紛糾し來れる議論を說明するのに不充分である。即ち眞に要求せらるゝ所は、如何なる種類の勞働、努力、若くは犧牲が生產的と考へらるる可きやを明示して、生產的及び不生產的なる二語を正確ならしむるかと云ふこと、是れである。茲に於て吾々は、近世經濟學の鼻祖と仰がるゝアダム・スミスの見解を窺はなければならぬ。

十五

扨てアダム・スミスは、其の大著「諸國民の富」の緒論中に「將來出現す可き有用なる生產的勞働者の數は、何處に於ても彼等を勞働せしむるために用ひらるゝ資本額、及び夫れが斯く用ひらるゝ特殊の方法に比例するものなり」と記述しては居るが、此の場合に於ける生產的(productive)なる語は、明かに有用なる(useful)と云ふ語と同義にして、不知不識の間に挿入せられたのに外ならない。何となればスミスは、「諸國民の富」第二編第三章に於ては逆に有用なると云ふ語を追出して、「不生產的勞働も亦有用なる可し」と云ふ方法を以て說明して居るからで

ある。(Adam Smith, Wealth of Nations, edited by E. Cannan, vol. I, p. 2, 314) 去れば之に關してバッテン氏は次の如く斷言したのである、

曰く

「價格、分配、及び資本を論述せる後に、第二編に生産的の學說を挾みたる順序を觀れば、此の學說は斯學の他の諸學說よりも遲れて、スミスの念頭に浮び來れる事實を知るのである。即ち若しスミスが他の諸學說を提唱せざる以前に生産的勞働の重要なる次第を知つたとすれば、スミスは決して價格、分配、及び資本が生産的勞働に依存するものに非ずとは云はなかつた筈である。然るにスミスは、第二編第二章に迄說き及べる際に「一物をも生産せざる怠惰者に依て消費せらる可き財」と、「利潤を得て其の消費の價値を再生する勤勉者の附加的人數を維持雇傭す可き原料、道具、及び生活資料の元本」とを對峙させたのである。若し其の際にスミスがより適切なる語を持合せたとすれば、恐らく怠惰者 (idle people) 及び勤勉者 (industrious people) なる語を用ひなかつたであらう。茲に於てか生産的勞働なる語は、右の章句の執筆せられし以後にスミスの語彙に加へられたるものと斷ぜざるを得ない」と、(Simon N. Patten, Development of English Thought, 189, pp. 239-40) 依て以下暫らく之に關するバッテン氏の所說を聞かう。因に怠惰者及び勤勉者なる語は、スミスの「グラスゴー大學に於ける講義筆記」中にも同じく用ひられて居る。(Lectures of Adam Smith, edited by E. Cannan, 1896, p. 210)

扨てスミスの思想に於ける此の變化を會得するためには、吾々は何よりも彼自身の發展を尋ねなければならぬ。他の英國倫理學者と同じくスミスも、亦マンデヴィルの諸著の影響を受けたるものにして、現に彼の講義筆記第二部第二章第十二節は、「如何なる浪費と雖も其の國内に於てなさるゝ限り有害なるものに非ず」との俗說の反駁に充當されて居る程である。(Lectures, pp. 207-11) 抑もマンデヴィルの蜜蜂物語 (Mandeville, Fable of Bees) の假定せる所は、即ち(イ)消費は産業の原因にして、又(ロ)奢侈と不善とは消費を刺戟するに欠く可らざるものなりとの二事である。而も此の說は、かのサー・ジェイムス・スチアートの「經濟學原理」中に遙かに巧妙なる形式に於て次の如く復活されて居る。曰く

「奢侈は好意ある眼を以て見られ、而して餘剩物の增加は皆人口增加の一手段と考へらるゝなり」と。(Sir James Steuart, Principles of Political Economy, 1767, Book II, ch. p. XV.) 從てスチュアートを以て觀れば、勤勉的供給者と奢侈的消費者とは、云はゞ同一家庭に於て同一の父に監督せらるゝ兒童に外ならなかつた。而もスチュアートの證明方法は極めて巧妙である。即ち彼は社會を(イ)勤勉的供給者及び(ロ)奢侈的消費者に二分して、相互に依存するものとしたのである。何となれば一方が貯へるためには他方が費しなければならぬからである。斯くして兩階級に適當の平衡を保たしめ得るや否やは、實に國家の消長に關係する所が多大であるとした。斯る生産消費平衡の思想は明かに外國貿易平衡の思想より胚胎したのである。

スミスは、如上のスチュアートの所論に對しては勿論隨所に是認せるものにして、唯だ其の場合にスミスが明かにスチュアートと指摘しなかつたまでのことである。是れを以てスミスは其の生産的勞働の章を執筆せる際には彼の胸中

にスチュアートを描けるものであると斷ずるとが出來る。然り、スチュアートの如く明確に此の問題を取扱へるものは從來一人もなかつたし、又彼の如く考慮せるものもないからである。加之スミスは、スチュアートを研究して彼の思想及び術語の影響を受けたと云ふ內的證據がある。例へばスチュアートの好んで用ひたる「勞働と需要との平衡」(balance of work and demand)なる文句は、スミスの手に依て「生產物と消費との平衡」(balance of produce and consumption)なる文句に改められて居るのも其の一例である。(Wealth of Nations, edited by Cannan, vol. I, p. 461) 其の他スチュアートが生產物と消費との均等なる國を繁榮國と斷せるに對して、スミスが消費以上に生產物の存在する國のみを富國と主張せるが如きも、亦兩者間に於ける類句であらう。而して斯く消費せられたる數量は所得となり、又節約せられたる數量は資本となるのである。此の新らしき對照が、生產的勞働に關する論議の中心となつたのである。

要之スミスの念頭に在りし學者は、かのフヰジオクラットの如く一の餘剩をも創造せざるものに對して生產的なる名稱を拒否する人々には非ずして、寧ろスチュアートの如く產業及び消費を以て繁榮の源泉となす人々であつたのである。之を正しく云ふならば、スミスはスチュアートとフヰジオクラットの中間の位置を占めたのである、即ちスチュアートに取ては總ての勞働が等しく生產的であり、又フヰジオクラットに取ては農業のみが生產的であつた。然るにスミスは、例の如く人間性の諸原理 (principles of human nature) 中に其の回答を求めて、之を節約の本能 (instinct to save) に歸したのである。(Patten, Development, pp. 240-42) 然らばスミスの與へたる生產的及び不生產的の定義は如何。

十六

スミスの生產的勞働と不生產的勞働とに關しては、幸ひに昨年七月の本誌「アダム・スミス生誕二百年紀念號中に小泉、向井兩教授の解說あるが故に、私は之に依て生產的及び不生產的に關するスミスの見解を簡單に紹介する。

「生產的勞働と不生產的勞働とは何に由て之を分つべきか。スミスの例示する所に依れば、製造工業に從事する勞働者の勞働は生產的にして、婢僕の勞働は不生產的なり。スミスは區別の標準を勞働が勞働の加へられたる客體の價値を增し、勞働の結果が具體商品として殘るか、或は勞働が何物の價値にも加ふるところなくして、勤勞が其給付の瞬間に消滅するかに求めたり。而して此生產的勞働者は資本に依て支へられ、不生產的勞働者は必ず所得に依て支へらる。從て一國資本の增減は生產的勞働者と不生產的勞働者との比例を動かし、從て國富の增減を決す可きの理なり。而して資本は吝嗇又は節約に依て蓄積せられ、浪費に依て減少す　故に若し或人々の浪費が別の人々の節約に依て償はるゝことなくんば、浪費者各人の行爲は勤勉なる者の麵麭を以て懶者を養ふことに由て、啻に其人自身を乞食たらしむるのみならず、又其國を貧困ならしむと。又曰く國富の何を以て成るやを問はず、各浪費者は公共の敵にして、各節約者は公共の恩人たるものゝ如しと。斯の如く生產的勞働は資本に依て支へらるゝものなりと雖も一定額の資本が動かすところの勞働量はその投下せらるゝ產業の種類に由りて一ならず。スミスは農業鑛山業漁業に投下せられたる資本は最も多量の勞働を動かし、從て又最も多額の價値を產出し、(二)工業(三)運輸業(四)分配（小賣

商業）順次之に次ぐものとなせり云々」。（本誌第十七卷第七號所載小泉教授論文「アダム・スミスの理論經濟學概論」一一五頁乃至一一七頁）

則ちスミスの考ふる所に依れば、人が手に觸れ得べき、又賣却し得る具體的財を其の勞働の對象として取扱へる場合には、其の勞働は生產的勞働である。之に反して僕婢、敎師、官吏等の如く、斯る賣却し得可き具體的財を對象とせざる勞働は、之を不生產的であるとなすのである。此の故にスミスは、農業、工業、商業をば生產的勞働とし、具體的財を對象とせざる僕婢、軍人、官吏等の勞働を不生產的勞働としたのである。

然らば何故にスミスは、所謂 Vendible Commodity を對象とするものを生產的とし、然らざるものを不生產的としたのであるか。彼は國富論第四編第九章にフヰジオクラットの學說を批評するに際して明白に此の問題に答へてゐる。即ち彼の曰く、「余が第二編第三章に於て工匠、製造業者及び商人を生產的勞働者となせるは、彼等の勞働が其の具體的貨物の中に固著體化せられ、從て其の財貨が彼等の賃銀及び生活維持の價値を代表するに到るからである」と。（Wealth of Nations, edited by Cannan, vol. II, p. 173）既に勞働賃銀及び勞働者の生活維持の價値が具體的財貨の中に附著固定し、是れが前者の價値を包括代表する以上は、其の財貨の價値が其の勞働を加へられざる以前に比して增加するのは當然である。此の故に生產的勞働とは勞働を加ふる財貨の價値を增加する效果を有する勞働であると云ふことが出來る譯である。（Book II. ch. III. vol. I, p. 313）

然るに僕婢を維持し使用せる資財は、彼等の勞働に依て其の存在を繼續するものではない。彼等の仕事は勤務である。此の勤務なるものは通常其の仕事をなす瞬間に消滅してしまうものにして、從て又其の勞働は何等具體的貨物に固著しない。故に其の勞働者の賃銀及び生活維持の價値は、之に代る可き何物をも有せざるが故に、勞働と共に其の儘失はるゝに到るものである。（Book IV., Ch. IX., vol. II, p. 173）

併しスミスは、不生產的勞働は全然何物をも造らないと考へたものではないらしい。其の證據としてキャナン氏は次の如き點を指摘して居る。スミスは「最も高貴なる又最も有用なる不生產的勞働と雖も、將來之と同一分量の勤務と代へ得可き物件を一も生產するものに非ず」、又「總ての不生產的勞働者の仕事は其の生產の瞬間に消失す」と云つて居る。既にスミスが「俳優の臺詞、辯論家の演說、又は音樂家の音調の如く、總て是等の者の仕事は其の生產の瞬間に消滅す」（Book II, ch. III, vol. I, p. 314）と云ふ以上は、明かにスミスは、俳優、辯論家、音樂家が少なくとも臺詞、演說、音調を生產する（produce）ことを否認せざるものである。否彼は、是等のものを生產する勞働は一定の價値を有することすら認めて居る。（同上）而して一定の勞働が價値を有するは、其の勞働の生產する物件に基因する事實を、スミスは恐らく否認し得ないから、若し押して問ふたならば彼は恐らく又臺詞、演說及び音調が價値を有することをも是認したであらうと。（Cannan, Theories of Production and Distribution, 3rd edition, pp. 21-22）

斯るが故に一の勞働が生產的なりや、將又不生產的なりやの標準は、一の勞働が或る物件を造り出すや否やにも非ず、又其物が價値を有するや否やにも非ずして、實はキャナン氏が指摘

し居るが如くに、生產する物に永續性ありや否やの問題であると一應は考へられるのである。即ち永續性ある具體的財貨なる場合には、賃銀及び生活維持の價値は此物の中に固著體化せられて保存せらるゝけれども、具體的貨物に非ざる場合には、生產と共に消滅して一國の資本財を形成しないと云ふのである。

乍併スミスは、キャナン氏が彼の考へとして指摘せる永續性其物に囚はれては居ないのである。換言すれば永續性のあるもの程富であるとは考へなかつたのである。否彼は金銀が永續的財貨なる故に、之を蓄積すれば無限の富を得ると考へたるマーカンチリストの思想を明かに批難して居る。即ちスミス曰く「吾人は英國の金物と佛國の葡萄酒との交換を主とする貿易を不利益なりとは思惟せず」と。(Bk. IV., ch. I, vol. I, pp. 405-406)勿論永續性の點より觀れば金物は遙かに葡萄酒に勝る。而して葡萄酒は僕婢の勤務よりも永續性を有して居る。此の事實よりして永續するや否やは、畢竟比較的のものである。故に永續性は、スミスの議論に於ける絕對的標準ではない。然らばスミスの生產的勞働の標準は、依然として其の對象が具體的財貨なりや否やに存するものにして、之を具體的財貨に限定するのは、具體的財貨は瞬間以上に其の存在を繼續するからである。此の場合に瞬間に消滅するや、一秒後に消滅するや、將又一分後一時間後に消滅するやは、畢竟程度の差なるが故に、スミスの生產力說は徹底せずと論ずる者のあるに對して、向井敎授は異なれる見解を持して居る。曰く

「スミスから見れば勞働の成果が瞬間に消滅するや、又は數分後に消滅するやは重大なる問題である、國富の增減の決する所である、而して決して程度の問題ではないのである。何となればスミスが常に頭に置いた所は、如何にして國富は增加するやであつた。而して之を增加するの道は、(一)生產的勞働者の數の增加、(二)彼等の生產能力の增加によるの外はない、而して更に此の二つは共に資本の增加によつて始めて之を實現し得るのであると考へたのである。(Bk. II, ch. III., vol. I, p. 325) 然るに此の資本を增加するものは吝嗇である。(ibid., p. 320) 即ち消費してはゐけない。節約しなければならぬ。然るに勞働の結果が直ちに其の瞬間に消滅したのでは節約の餘地は存在しない。萬一生產せられて少しの間でも存在してをれば、其の間に氣が變つて之を節約し、又は賣却して資本となすことが出來るのであるが、即時に消滅したのでは消費か節約かそれを選擇するの餘地がないのである。此の故に生產の結果が瞬間以上存在するや、將た又數分の後に消滅するやは少なくともスミスの考を以てすれば程度の差ではなくして、實は消費と節約の分るゝ境であり、富の增減の繫る所のものである。換言すれば生產的なりや否やの標準となるものである」と。

斯く解することに依て初めてスミスが具體的財、又はキャナン氏の如く物質財 (material object) と云はずして、常に必ず賣却し得可き財 (vendible commodity) と云へる理由が分るとは、向井敎授の見解の結末である。何となれば消費財も賣却して資本となし、以て之を生產に利用し得るが故である。(本誌第十七卷第七號所載向井敎授論文參照、二二〇頁乃至二二六頁)

併しスミスの生產の意義を尋ねるのは本論の目的ではない。要は生產的及び不生產的なる語に對するスミスの見解を求めるにあるが故に、彼に關しては此の邊にて筆を擱く。以上に於て

知らるゝ如く、スミスは生産的及び不生産的なる語を單に勞働にのみ限定して、未だ消費、支出等に對しては之を適用しなかつたのである。乍併是等の語がスミスの時に及んで漸く其の意義を持つに至つたことは事實である。而もスミス自身亦、生産的及び不生産的なる語に就て次の如き斷言を附して居る。曰く

「佛蘭西に於ける二三の有名なる著者は異なれる意義に於て夫等の語を用ひて居る。何れ本書第四編の末章に其の意義の不適當なる次第を説明することゝしやう」と。（Bk. II, ch. III, vol. I, p. 313）即ちスミスは國富論第四編第九章に於てフヂオクラットの所謂 Sterile を英譯して barren and unproductive として居るのである。（Bk. IV, ch IX, vol. II, p. 164）然らばスミスの繼承者は、生産的及び不生産的なる語に對して如何なる意義を與へたるや。

十七

上來縷述したるアダム・スミスの見解に依れば、如何なる勞働にても夫自體が「一の固著せる賣却し得可き物品」（a fixed and vendible commodity）の中に實現せらるゝ限り、總ての勞働は生産的であるのである。從て前代に比すれば生産的勞働の標準は擴大されたのである。之にも拘はらず尙ほスミスの後繼者は、此の制限に反對したのである。例へば「國富論」の一佛譯者たるガルニエー（Germain Garnier）セイ（Jean Baptiste Say）、ヂュノアイエー（Charles Dunoyer）等の如き佛國經濟學者は之に屬するのである。

勿論前項の略述に依ても知らるゝ如く、アダムゥスミスは、佛國に於ける彼の後繼者等が問題とせる所謂非物質的生産物、即ち肉體的乃至心意的諸能力若くは諸熟練をば一國の富と看做す可きや否やを考慮しなかつた譯ではない。併しスミスは、所謂勤勞に對して「生産する」（to produce）と云ふ語が通常適用せられざる事實に想到したのである。從て例へば官吏、醫師等の勞働の有用なることを疑はなかつたのであるけれども、スミスは單に夫等の勞働が通常の意義に於ける物品を生産せざる次第を表示するに過ぎなかつた。即ちスミスの意義に於て「生産すること」とは、瞬間的若くは手に觸れ得ざる滿足と區別せらるゝもの、如き、其の期間の長短に關せずに永續す可き富を社會に提供することである。今之をミルの用語にて云へば「滿足の永續的可能性」（permanent possibility of satisfaction）を供與することである。故に若しもスミスの生産的勞働及び不生産的勞働の區別が是れ以上何等意味する所なしと假定すれば、夫れは正しく一種の煩雜極まる辯證法となるのである。

一體有用なる勞働と無用なる勞働とを區別することは、恰かも善惡の區別に於けるが如く甚だ難事である。併し永續す可きや將又即時に消滅す可きやの標準を立てゝ、有益なる支出と無益なる支出とを區別することは、分り易き實用的區別である。斯くスミスのために辯ずるのはボーナー教授である。例へば富者の建物、家具等の如き「固定されたる賣却し得可き物品」は貧者の掌中に歸することもあらうけれど、之に反して富者の奢侈的食物は左樣に廣く配分せられないのである。假令欲求を滿足せしむるものゝ總てが富であるとしても、尙ほ永續性あるものと、然らざるものとを區別することは極めて容易い。去ればスミスの所謂生産的勞働は、此の意義に於て不生産的勞働よりも公益上遙かに必要である。即ち其の利益は、社會成員の大多數の上に及ぼすからである。換言すれば夫れは、

社會成員の大多數の利益、即ちアダム・スミスの考へたる「人々全體」(the whole body of the people)の利益であるからである。(本誌第十七卷第七號所收增井教授論文第一八三頁以下參照及び James Bonar, Philosophy and Political Economy, 1922, pp. 161-162.)

以上は、佛國に於けるスミスの後繼者が彼の生産勞働說に與へたる難點、及び之れに對する答辯である。但しスミス所說に對しては、一人も贊意を表しなかつたのではない。例へばシスモンデー(J. C. L. Simonde de Sismondi)の如きは其の一人である。(Sismondi, De la Richesse Commerciale. 1803, vol. i. pp. xxxiii, 29, 84.)然らば英國に於けるアダム・スミスの後繼者は、斯說に對して如何なる見解を持したるか。

十八

先づ第一にスミスの生産的勞働及び不生産的勞働なる區別に於ける矛盾を指摘したる者は、ローダーデール伯(James Maitland Lauderdale, Earl of Lauderdale)であらう。即ち伯の曰く、

「諸商品の價値は夫々の永續性に依存すと云ふ區別を最も辛辣に批評する者は、生産的勞働と不生産的勞働との區別をば其の生産物の永續するや否やに依存せしめんと欲する所の人々なり云々」と。(Lauderdale, An Inquiry into the Nature and Origin of Public Wealth, 1804, p. 152.)

而して伯に從へば眞の意義に於ける富とは、永續性の有無を問はず「人間の欲求の諸對象の豐富」(the abundance of the objects of man's desire)を指すのである。此の見解は、兎に角一八〇四年七月號の「エディンボロ評論」誌上に於けるローダーデール伯の著書紹介中に採用せられしものである。即ち右の批評家に依れば、アダム・スミスの所謂不生産的勞働とは、彼等の仕事を輕視するの意味を表示するものに非ずして、單に「彼等は社會の富を增殖するものに非ず」(they do not augment the wealth of the community)と主張するに過ぎないと云ふのであるけれども、是れは聊かスミスの見解に反するものである。(Smith, Wealth of Nations, edited by Cannan, vol. II, Bk. IV, ch. ix, p. 162. 參照)今右批評家の論旨を要約すれば次の如くである。

「一般には、スミスの所謂生産的勞働者及び不生産的勞働者なる二階級の實力に於ける區別程確實なるものはないと考へられやう。元來凡ゆる勞働の目的は、社會の富を增殖するにある。換言すれば其の社會各員の生活資料、慰安、享樂等を取得す可き基金を增加せしむるにある。然らば富の定義を單なる生活資料に限定すること

とは、不合理である。從て斯る見解を持する人々は、屠肉及び清酒をも生活資料と認むるものである。乍併如上の二物は何れも必要品ではない。何となれば若しも總ての慰安及び享樂が何等の目的をも有せずとすれば、野菜及飲料水丈けにて生命の維持は充分であらうから。而も斯る推理の方法を以てすれば生産的なる形容詞は云はゞ各地の氣候と土壤との上より最小の勞働量を以て最大の收穫を獲得せらる可き種類の食物を栽培するが如き用途に限定せられざるを得ない。……而して如何なる國に於ても、或る用途の變化(variation)は、全く右の定義に一致せざることゝなるであらう。故に本題に對する斯る見解に從へば僕婢、司法官、軍人、及び道化役者は、總ての文明社會に於ける農夫及び製造業者と同一の地位を占む可きである。其の勞働の生産物は、何れの場合に於ても社會の必要品慰

安品、若くは奢侈品を供給するものと考へらるゝのである。而して其の國民は、他の總ての商品を豐富に所有する他の國民よりも遙かに多く眞の富を所有するものである」(Edinburgh Review for July 1804, p. 355, quotated by E. Cannan's Theories of Production and Distribution, p. 26.)

續いて一八一〇年刊行の大英百科辭典第四版中に於ける「經濟學」なる項目の執筆者は「甚だスミスの學說を墨守するものなり」と斷言しながらも、尙ほ生產的勞働及び不生產的勞働なる區別に就て左の如く論じて居る。曰く

「今日本題に就て最も優秀なる著者は、此の區別をば無用のものとして取扱はんとする傾向がある。彼等の主張する所は、即ち生活の便宜品及び快樂品の豐富なる點にのみ存し、而して是等の物件の增殖に貢獻する人々は、皆吾々の手に觸れ得可き或る商品を提供する者ではあるまいが、併し何れも生產的勞働者に相違ないと云ふのである」と。(Encyclopædia Britannia, 1810, 4th edition, vol. xvii. p. 112.)

然らばジェイムス・ミル、ロバート・マルサス、デヴォッド・リカードー等所謂英國正統派經濟學者は、右の大英百科辭典第四版中に於ける「經濟學」なる項目の執筆者の言の如く、果してスミスの生產的勞働說を無用視したであらうか。是れ次に私の窺はんと欲する所である。

佛蘭西經濟學に於る價値論の發達（三）

津田誠一

十一

正統學派の佛蘭西に於る代表的權輿 Jean Baptiste Say (1767-1832)

は異邦の思潮に浸潤するの餘り、勢ひ故國の傳統に疎遠の謗りを免れず Physiocrates の殘黨 Dupont de Nemours の如き此點に關して屢々露骨に慊厭の情を表白したるが、獨り價値論に於ては聊か趣きの異るものあり。即ち Smith, Ricardo の客觀價値說と Turgot, Condillac の主觀價値說とを左右に顧眄し交々兩說を攝取しつゝも、尙且つ效用を費用より遙かに重しと斷ずる見解に依つて、彼れは兩者を折衷したりと云ふよりも寧ろ後者に傾倒した。是れと同時に從前對立拮抗せる兩種價値論の葛藤は漸く爰に終熄を告げ、將に第二期建設の時代に遷らんとする轉機に到達せるものである。

Say も亦た價値の考究を專ら交換價値にのみ限局する。曰く「物の價値或は交換價値或は評定價値とは、人が是れと交換に於て收受し得る所の、價を附し得可き他物の分量である」(Épitom des principes fondamentaux de l'Économie Politique,—petite édition Guillaumin, p. 185)。交換或は交換の行はれ得る能力が物の價値を決定するに必要なるは、人の認むる所である。「所有者が全然單獨にて其所有物に賦與する價値は、所詮獨斷且つ曖昧である。即ち所有者は事實毫も富裕となる事無くして、其所有物を過大に評價する事が出來やう。然るに一旦他の人々が此物を獲得せんが爲に、同じく價を具備する他物を是れと交換に於て與ふ可く諾する時は、其與ふるを諾する後の貨物の分量が前の貨物の價値の尺度である」。(Traité d'Économie Politique, ou Simple Exposition de la Manière dont se forment, se distribuent et se consomment les Richesses, 5e édit. Rapilly, tom. I. pp. 2-3)。即ち物の價値が確定する爲には「反對の利益を有する他人